ろうそくと貝がら

小川未明

青空文庫

一

海の近くに一軒の家がありました。家には母親と娘とがさびしく暮らしていました。けれど二人は働いて、どうにかその日を暮らしてゆくことができました。

父親は二年前に、海へ漁に出かけたきり帰ってきませんでした。その当座、たいへんに海が荒れて、難船が多かったといいますから、きっと父親も、その中に入っているのだろうと悲しみ嘆きました。

けれど、また、遠いところへ風のために吹きつけられて、父親はまだ生き残っていて、いつか帰ってくるのではないかというような気もしまして、二人は、おりおり海の方をながめて、あてなき思いにふけっていました。

「お母さん、お父さんは死んでしまわれたんでしょうか。」と、娘は目に涙をためて、母親に問いますと、

「いまだにたよりがないところをみると、きっとそうかもしれない。」と、母親も、さびしそうな顔つきをして答えました。

「ほんとうに、お父さんが生きていて帰ってきてくだされたら、どんなにうれしいかしれない。」と、娘はいいました。

「生きていなされば、きっと帰ってきなさるから、そう心配せずに待っていたほうがいい。」と、母親は娘をなぐさめました。

娘は昼間仕事に出て、日が暮れかかると家に帰ってきました。窓を開けると、かなたに青い海が見えました。静かに、海のかなたが、赤く夕焼けがして暮れてゆくときもあります。また、灰色に曇ったまま暮れてゆくときもあります。またあるときは、風が吹いて、海の上があわだって見えるときもありました。

月のいい晩には、往来する船も、なんとなく安全に思われますが、海が怒って、真っ暗な、波音のすさまじいときには、どんなに航海をする船は難儀をしたかしれません。

そんなとき、娘はきっと父親のことを思い出すのでありました。もし父親が、こんな嵐の強い晩に、海をこいで帰ってこられたなら、方角もわからないので、どんなにか難儀をなされるだろうと、こう考えると、娘はもはや、じっとしていることができませんでした。立ち上がって、窓からいっしんに沖の方を見つめていました。

二

父親の行方がわからなくなってから、二人は、毎晩仏壇に燈火をあげて拝みました。

「お母さん、外はたいへんな風ですね。お父さんが、今夜あたり帰っておいでなさるなら、沖は荒れて真っ暗でどんなにお困りでしょうね。」と、娘はいいました。

「そんなことはないよ。こんな晩にどうしてお父さんが、あの船で帰っておいでなさるものか。そんなことを考えないほうがいいよ。」と、母親は答えました。

「だって、帰っておいでなさるかもしれないわ。わたしは、お父さんが見当のつくように、ろうそくの火を点してあげるわ。」と、娘はいって、窓ぎわに幾本となく、ろうそくに火をつけてならべました。

なにしろ風が強いので、ろうそくの火は幾たびとなく消されまし

た。けれど、娘は消えると、点け、消えると点けして、沖から、遠く陸に燈火が見えるようにと、熱心にろうそくの火を点していたのであります。

娘は、ついに家にありったけのろうそくを燃やしつくしてしまいました。もはや、このうえは、遠く離れた町にまでいって買ってこなければ、点けるろうそくはなかったのであります。

「おまえの志は、よくお父さんにとどいたと思います。もうろうそくがなくなったから、さあ休みましょう。」と、母親はいいました。夜も、いつしか更けていました。娘もしかたがないと考えて、二人は戸を閉めて床に入ろうとしました。

そのとき、だれか戸をたたくようなけはいがしました。

「だれかきたようだ。」と、母親はいいました。

「ほんとうに、だれか戸をたたくようですね。いま時分だれだろう。きっと、お父さんが帰っていらっしたのですよ。」と、娘は勇んで、さっそく、戸口のところへ走っていきました。

「お父さんですか。」と、娘は叫びました。けれど、戸の外の人は返答をしませんでした。

「どなた。」といいながら、娘は戸を開けました。すると、黒い装束をした脊の高い、知らぬ男が突っ立っていました。娘はびっくりして、後ずさりをしました。黒い装束の男は、家の中へ入ってきました。

三

「あなたは、どこからおいでなされました。この真夜中に家ちがいじゃありませんか。」と、母親は驚いた顔つきで、男をながめながらいいました。

「いや、家ちがいじゃありません。じつはお父さんからの言づてがあったのでまいりました。」と、黒い装束をした男は、穏やかに答えました。

「え、家のお父さんからですか?」と、娘はびっくりして、男のそばに駆け寄りました。

「そうです。あなたのお父さんはいま、遠くにいられます。けれど、それはじつに暮らしいいところです。あなたのお祖父さんも、いっしょに住んでいられます。あなたが毎夜、思っていてくださることは、よくお父さんにわかっていますので、どうか心配せずにいてくれるようにとのお言づてでございました。」と、その男はいいました。

娘と母親は、なおいろいろと、その男に父親の身の上を聞こうと思いましたが、

「今夜は、もう遅いから、いずれまたお伺いいたします。」と、男はいって、袋に包んだものを差し出して、

「これは、ほんの土産です。私が帰った後でごらんください。」と、娘にその袋を渡して、男はこの家を出て、どこへか闇の中に消えてしまいました。

男が去った後で、娘は袋を開けてみますと、その中には、無数の金銀の粉が入っていて、目もくらむばかりでありました。二人は、いったいこれはなんだろうと不思議がりましたが、夜が明けたらよく見ようといって、床に就きました。

明くる日、二人はその袋を開けて子細に見ますと、金でも銀でも

なければ、よごれた貝がらでありました。

「あれはきっと、きつねかなにかの化け物だ。こんな貝がらなどを持って、おまえをだましにきたのだ。こんなものは捨ててしまい。」と、母親はいって、袋の中の貝がらを、すっかり窓の外に投げ捨ててしまいました。娘は、二、三日たって窓の外を見ますと、捨てた貝がらが、すっかり、美しいかわいらしい黄色な花になっていました。

その日から娘は、朝晩唄をうたいながら、その花を摘んで遊びました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　1」講談社
1976（昭和51）年11月10日第1刷
1977（昭和52）年C第3刷
※表題は底本では、「ろうそくと貝《かい》がら」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：江村秀之
2013年9月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ろうそくと貝がら

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/